

「真の命を得るために、未来に備えて自分のために堅固な基礎を気づくようにと。」

テモテへの手紙 6章 19節

ピンチをチャンスに変えるという言葉がありますが、皆さんはピンチが自分にやってきたとき、どのように乗り越えていますか？

私はバスケットボール部に所属していますが、4月の大切な試合でピンチがやってきました。引退が迫る私達3年生は、区大会1位通過という目標を大きく掲げていました。力の入ったその試合で、治りかけていた足首をひどく痛めてしまいました。激しい痛みに応援する気力もなかった私は、一人取り残された気持ちになり、沈みました。さらに、2週間後に控えていた体育大会への参加が危うい状況になってしまいました。学校の授業で体育が一番大好きな私は、毎年体育大会に命を懸けて挑んでいることは言うまでもありません。

松葉杖生活が始まった私ですが、毎日リハビリに通い、たとえ痛みがあったとしても我慢して無理やりにも体育大会の競技に参加する意気込みで毎日を過ごしていました。もちろん、バスケの練習も市大会に向けてその時自分にできることを一生懸命頑張っていました。その2週間の間、色々な葛藤がありました。協議に参加したい私と、参加に反対の家族。その上病院の先生には「バスケが好きなら、今何が大切かを考えなさい。」と言われてしまいました。競技に参加することが当たり前だった私は、参加していない自分を想像することができず、参加できない体育大会に意義を見つけることもできない状態でした。

そんな中、私が手にしたものは家にあったあの有名な渡辺和子さんの「置かれた場所で咲きなさい」という本です。36歳で岡山のノートルダム清心女子大学の学長に任命された渡辺和子さん。岡山という土地に赴任し、学長という風当たりの強い立場に置かれ、四苦八苦されていた渡辺和子さんの様子を見かねた一人の宣教師から贈られた言葉が「置かれた場所で咲きなさい」でした。「『こんなはずじゃなかった。』そんな苦しい状況の中でも咲く努力をして欲しい。」と、渡辺和子さんはおっしゃっています。「でもどうしても咲けない時もある。雨風が強い時、日照り続きで咲けない日、そんな時には無理に咲かなくてもいい。その代わりに根を下へ下へとおろして、根を張るのです。次に咲く花がより大きく美しいものとなるために。」

この渡辺和子さんの言葉が、素直にまっすぐ私に届きました。自分の感情のまま行動することが恥ずかしく思えました。そして今年の体育祭は、友達の応援、部活競技の応援、そして係の仕事を精一杯頑張ろうと切り替えることができました。今までとは違う角度から体育大会に参加して、味わったことのない充実感を得ることができました。頑張っているみんなを応援することでパワーと元気をもらいました。そして部活では、バスケ部のみんなと共に戦った結果、ベスト8を手にすることができました。

どんなに苦しい状況でも変えられない今があるなら、目の前にある今を受け入れること。そして、今の自分に何が大切かを考えて行動すると必ず明るい未来が待っていると思います。私にやってきたピンチは、共に頑張ってきたバスケ部のみんなと喜びを分かち合える未来につながるチャンスに変えることができたと思っています。

これからも机の上での勉強では得ることができないたくさんの経験を、この女学院で思いきり楽しみたいです。